

「普通」に苦しんでいる君へ

• Doosub Jahng (jahng-doosub@umin.ac.jp)

「選択」に苦しんでいる君へ

「普通論」

年未から始まった小旅もそろそろ終わりの予感がする。
普通に生きる、ってなんだろう。
この数年間、ひたすら問われ、問い続けてきたテーマだ。
自分自身の正体性をはじめそれに苦しむ人のために、
学者の端くれとして生きてきたなかで、
普遍的モデルの発見という帰納は、
演繹とともに重要な貴務でもあったから。

普通に生きるという言葉の意味することはなにか。
 乗っているこの新幹線のスピードは「特別」、急行で異常であり、
 唯一無二の天気園を根拠に笑顔で予報するものも、
 予報だけのために、袍に傘を入れる純粋さも異常であり、
 そもそも死ぬ動物が生きようとすること自体が異常であるなかで、
 いても簡単な我々は「普通に」と自分、周囲に置く。
 模範や規範や平凡という異常な言葉を、普通に使いこなすこそが異常ではないか。
 整理をするだけでも「普通」にはできなさそうな事々たるテーマだ。
 こそゆめんの長い旅のなかの、刻みの「小説」だった。

代表値。
生まれては死ぬという普通も、
生まれては、学び、結婚と子供、孫、寿命を全うする普通も、
幸せな一生も、健やかなひとときも、
学歴も、財産も、名声も、地位も、
悩み苦しみ、二転三転の波瀾万丈も、
傷つき、傷つけられるのも、
叶えられない夢も、憎しみも、妬みも、
+も-も0も、人の数ほど「普通」に存在する。
算術平均も中央値も最頻値も1であるにも関わらず、
限られたデータで作り出された架空の数字に翻弄され、誰もがその幻に自分を重ねる。
なにもをもって普通というかは、他人を巻き込んで存在しない。
無限の変数で値をただ普通という名詞に閉じ込めただけだ。

分母。

健全は数で決まると解いてきた自分自身の過去を振り返る。

できるだけ多くの人が進む道こそが健全であり、その道から外れた人は不健全という烙印とともに歩むと解いてきた。

しかし、誰もが同じ状態でないなかで、大勢の人の真似だけで生きてきたと嘘つく人の数を、異常な道を自分の道と受け止める、止めた、そういうことにした、と慰める人の数を、インタビューに対して真意の分らない答えの数を分母にすれば、割合の誤差は大きくなっていく。

真の値かどうか分からない人の数を気にするのは、真似であり、慰めであり、逃げに過ぎない。

行き着くところ、自分だけが知る実数だけが分母となる。

分子。

どんな人間であれ、定義のない幸せを願うその過程にもがいている。

幸せは瞬間か一生か、それともそれまでなかった驚きか、以前味わったことの再現かの定義はだれも分かっていない。

ただ、お互い勝手に勘違いしているだけ。

唯一分子になれる自分だけが知る実数を知る過程が要る。

その過程とは、安定に酔いしれては変化を求めるか、変化に翻弄されては安定に慣れるか、という同一性を持つ。

実数を知るには、

同一性の過程の中にあるすべての出来事を吟味し、自分の支点に基づく本質に気づく必要がある。

一時的気持しかたた翻弄されただけでは、

どれだけ自分と真剣に向き合ったかに関わる。

出来事の吟味。

願わくば、出会いの恐怖と別れの苦しみの数が、
痛みの苦痛と直りの繰り返しの数が、
ありもしない二類の他人との比較ではなく、
自分の人生の中で占める数が、少ないこと。

送る時間と待つ時間が、悩む時間と癒す時間が、
慰める時間と慰められる時間が、
もがく時間と立ち直る時間が、
自分の人生において短いこと。

少なく短ければ、多く長ければという単純さではない。
その数と時間こそが人生の糧でもあるわけ。

誠実にまた真剣に向き合った結果。
ある時点までの時間を分母にして、
もっとも安らぎ、もっとも幸せだったところにて、
いくら逃げようとしても、いくら達さかろうとしても、
気がつけば、心のどこかに残るDNAによって、いつのまにか戻されてしまう。
その線より遠しの数分子として悟った時に人はじめて、
これから紡ぐと思わざるを得ない真の代表権、割合が計れる。

一度きつて思ひ描いた。
 若い座にたち、もう立ち上がれなくなる居心地のいいソファでありたい、が異常と言
 旅に疲れて帰ってきた時にもたれか座れる椅子でありたい、が異常と言われようが、
 気づけばそこに戻っていった支点・本質の要数に気づくこと。
 自分の生き方を置き、なるようにしかならないという真理を、
 天命を待つことに逃げず、それまでの過程、すなわち人事を尽く過程に対する、
 極めて個人的な割合が、「普通」なのである。
 偏った標本抽出に加えて曖昧な値による母集団推定では、
 無意味な傾向に翻弄されてしまう。

他人は参考文献であって、本論文にはなれない。
タイトルは、自分がつけるものである。
世間や他所や他人ではなく、自分の中の、
気づけば繰り返してきた実数の割合が普通なのである。

幾度もあった選択肢、完璧に見えた条件、みなの後押し、ひと時のあらざで塗り重ねられた人生の分かれ道において。常に自分に問いかけていた「普通」に対して、安易な答えはなかった。気づいたときには、いつのまにか戻っていった場所への強い記憶だけ。それを「普通」と言わずになんと呼ぶのだろうか。

要は、本質に気づくまでの道のりと時間だ。
遠く、長ければそれだけの残骸が残るだろうし、
近く、短ければそれだけの不安が残る。
願うのは、ほどよい過程とほどよい時間で気づくこと。

長い時間向き合ってきた、普通論。
その間の楽しみやもがきが異常に映っていたらしいが。
私には「普通」だった。
普通に生きたいとあれほど切に願いながら、
普通の意味が分からず、異常に生きてきた。
それを普通と名付け、自分を劣るものもまた普通なわけ。

2011年2月16日

自分らしく生きようとするけれど、
いつもの自分と普通の人生が分からず、
それでも懸命に生きようとする人に捧げる。

DJから
DJ 2011-02-16 21:54

選択とは捨てること。
ウドンかソバかあるいはラーメンか。どれもが入る胃袋は最初からない。
ベストチョイスは、同じ条件の元ですべてを食べたあとの理論上、かつ結果論。
消去法で生き残ったものだけが、私の体の中に入る権利を得るが実態。
当然ながら、選ばれる数より、捨てられる数が等しいかより多い。

最高、永遠、完璧を求める欲望は、人生を豊かにはするが、捨てられた選択肢の残骸を色濃く残す。

不惑、自然体、長閑さは、人生を豊かに見せるが、捨てられた選択肢の残骸を裏庭に隠す。

選択の過程は幸せ。
評価項目が増えれば増えるほど、どれもが喜びを与える可能性を潜む。
選択の過程は不幸。
捨てられたものは後悔で、拾われたものは次回の不安で眠れない。
選択は平等。
選ばれたものはそのうち、捨てられたものはそのうち、
もしも選んだ選択だったらいっ言で両者ととも奈落に落ちる。

選択の究極な形、天秤。
2枚の皿、一つの支点、いくつもの重りが構成部品。
条件の数とともに重りの数も増えるが、皿はすぐ一杯になる。
支点のぶれる天秤は倒れる。

選択の究極な方便、点数。
59点で捨てられ、61点で拾われたものに明日はない現実の中で、
出題者すらその分野で100点は到底無理なくせに、
ごく一部で全てを調べたつもりの方便と運の背比べ。

マイナスがプラスに変わる逆転劇に戦慄を感じる、しよせんは身勝手、しよせんは忘れん坊の人間が下す選択のよろさ、恐ろしく、心ななす。自分が捨てられたことに気づかず、自分が選択されたことに気づかず、気まぐれな「オレ様」が下す偏見に満ちた選択の点線だけは避けたい。

正しい選択。
選択が正しいかどうかは結果論。
人生の道において、自分が選んだ道を、
ベストのはずだと慰めるか、誤摩化するか、いっそうの事記憶から消すか。
結局のところ、ベストにしていくなかに道はない。

ベストの計算。

母母は人生が終わるときに定まる。その時ベストは既に過去。

ベストのために捨ててきた犠牲者たちへの敬意を忘れがちな私たちは、
今の自分のために犠牲になってきた多くの選択肢もいとも簡単に忘れる。

なにかしらを諦めては運良く残されたものに心寄せせるのは、
捨ててきた犠牲者と選択肢へのせめてもの心遣いかも知れない。

支点。

実績に基づく自分らしさ、普通。

人生の中で、なぜか共通する自分の本質に気づくこと。

その答えが、「自分さえよければ」ならそれで。

その答えが、「もうよりあげろ」ならそれで。

その答えが、愛する、愛されるの線形ではなく、「愛し合う」ならそれで。

その答えが、ソファەرならそれで、イスならそれで。

その普通こそが、選択における「ぶれない支点」となる。

願わくば。
多種多様の重りのゴミの山より、少しでも早く支点を探したい。
例えその道が険しくても、例えその道が寂しくても、
捨ててきた、捨ててきた傷を癒したいから。
たった一度の人生の期程にバストに気づいては、もう遅いから。
過去の今日の他日のバストに、期程ではなく少しでも早く気づき、
バストの確信を持ち、バストにしてゆく、期程を笑顔で迎えたいから。

2011年7月1日

その場限りの選択があたかも自分の普通だと勘違いし、
支点の壊れた天秤に山のように重りを載せては、遅すぎたベストに涙するより、
一日でも早くベストに気づくことから始め、
一日でも長く幸せであってほしい人に捧ぐ。

DJから
DJ 2011-07-02 01:50